

## 科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成 25 年 6 月 14 日現在

機関番号：32606

研究種目：基盤研究（C）

研究期間：2010～2012

課題番号：22530676

研究課題名（和文） 社会的判断における誤帰属過程の顕在性・潜在性に関する検討

研究課題名（英文） A study on the explicit-implicit nature of misattribution process in social judgment.

研究代表者

外山みどり（TOYAMA Midori）

学習院大学・文学部・教授

研究者番号：20132061

研究成果の概要（和文）：本研究では、さまざまな社会的判断との関連で吟味されてきた誤帰属の過程について、その顕在・潜在性、意識・無意識性について理論的、実証的の双方から検討した。理論的には、誤帰属の過程を本来の原因が何らかの生理的・主観的内的状態を引き起こす段階から最終的な社会的判断に至るまでの段階に分け、それぞれの顕在性・意識性の程度について考察した。実証的には、閾上・閾下の刺激を使った実験を行い、その違いを検討した。

研究成果の概要（英文）：This study examined, both theoretically and empirically, the implicit-explicit nature of misattribution process in social judgment. In theoretical terms, the level of consciousness of each stage involved in misattribution process was discussed. Empirically, two kinds of experiments were conducted to examine the effects of stimuli presented subliminally or supraliminally.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合計
2010年度	1,200,000	360,000	1,560,000
2011年度	1,100,000	330,000	1,430,000
2012年度	700,000	210,000	910,000
総計	3,000,000	900,000	3,900,000

研究分野：社会科学

科研費の分科・細目：心理学・社会心理学

キーワード：社会的認知、帰属、意識・無意識

## 1. 研究開始当初の背景

## (1) 誤帰属とは

誤帰属（misattribution）とは、文字通り誤った帰属、つまり真の原因でないものに原因を帰することを指す。語義からいえば、かなり広範囲の現象に適用されてしかるべきであるが、一般にこの語が用いられる対象は自己帰属に限定されており、自分が感じている生理的な喚起や、既知感・親近感・知覚的流暢性などの内的・主観的感覚の原因を、本来の原因ではない別の要因に帰するという現象に対して適用されている。

## (2) 誤帰属研究の経緯

誤帰属に関する研究の発端は、1960年代にさかのぼる。当初は Schachter の情動二要因理論（Schachter, S. 1964）に関連する情動帰属の問題として研究が始まった。

情動の二要因理論とは、喜び、悲しみ、怒りなどのような情動を経験するためには、生理的な喚起（physiological arousal）と、情動に関連する認知という2つの要素が必要であるとする理論である。人間は自分が感じている生理的喚起の原因を探し、それによって情動の帰属を行うが、その際に、さまざまな誤解、誤認知が生じる。

まず、本来は情動とは関連のない原因によ

って生じた生理的喚起を、情動的な原因に帰属するというタイプの誤帰属がある。具体的には、薬剤の注射などの影響で生理的喚起状態が生じているのに、本人はそれを知らない場合、自分の生理的喚起を周囲の情動的な原因のせいであると誤って解釈することがある。これは Schachter & Singer (1962) の有名な実験で明らかにされたタイプの誤帰属である。また逆に、不安や恐怖などのような情動的な原因によって引き起こされた生理的喚起状態を、物理的環境や薬物など、情動とは無関連な原因に帰属するというタイプの誤帰属もある。このほか、2種類の原因が関与して強い生理的喚起が生じている場合に、通常よりも情動が強く経験されるという事例があるが、これは2種類の原因による喚起を区別することができず、一種の混同による誤帰属が生じているケースであると考えられる。

1980年代の後半以降になって、情動の誤帰属とは別に、より認知心理学的な性質の誤帰属が注目されるようになった。これは記憶研究者である Jacoby, L.L.らが、既知感や知覚的流暢性などの微細な内的感覚に基づいたさまざまな認知的・評価的判断を、誤帰属という観点から解釈したことに端を発している。つまり先行刺激や先行課題の影響で生じた内的感覚を、本来の原因ではない別の要因に帰属することによって、後続の判断が左右されるという種類の誤帰属であり、単純接触効果、有名性効果、プライミング、真実性の誤認などの現象がこの観点から解釈され、研究されるようになった。これにより誤帰属研究の範囲が大幅に広がり、その後今日に至るまで、認知心理学、社会心理学双方の研究者が多くの実証的研究を行っている。

## 2. 研究の目的

このように誤帰属の現象はさまざまな領域の中で見られるが、これは本人にも明瞭にその由来が自覚されないような潜在的な内的状態に対して、意識的・顕在的なレベルで説明を与えるプロセスであるということが出来る。近年の社会的認知研究で関心を集めている、意識的・顕在的過程と無意識的・潜在的な過程の問題を考察するための格好のテーマである。ただし、誤帰属の過程を構成する各段階を詳細に検討するならば、その中には、比較的潜在的な段階もあり、また顕在的な段階もある。どの段階、どの要素が顕在・潜在的であるのかを理論的に整理しておくことは、今後の研究の進展のために重要だと考えられる。

また実証的な問題としては、刺激自体の顕在・潜在性の問題が重要になる。具体的には実験参加者がその存在に気づく閾上呈示であるか、気づかない閾下呈示であるかの違い

が、どのような効果の差を生じるかを検討する必要がある、また課題の性質と顕在・潜在性の関連を吟味することも、重要な課題となる。

このように本研究では、理論的考察と実証的データ収集により、誤帰属の顕在・潜在性の問題にアプローチすることを目的とした。

## 3. 研究の方法

目的で述べたように、本研究では理論・実証の両面から、誤帰属の顕在・潜在性の問題を検討した。

(1) 理論面では、先行研究および研究者自身が行った研究の結果に基づき、誤帰属を構成する諸要素、諸段階について、潜在性の程度を理論的に考察した。

(2) 実験的な研究としては、主にプライミングを用いた検討を行った。具体的には、帰属における「人への内的帰属 vs. 状況への外的帰属」という枠組みを用い、先行課題で、状況に関連する語または特性に関連する語に接触させ、それが後続の課題における判断にどのように影響するかを検討した。その際、先行課題におけるプライミング手続きを閾上の作業として行うか、あるいは閾下呈示によって行うかにより、刺激の顕在・潜在性を設定し、効果を比較した。具体的な実験手続きの詳細は4.の「研究成果」の欄に記す。

## 4. 研究成果

### (1) 理論的考察

古典的な帰属理論で想定されてきた帰属過程は、比較的意識的で、熟慮的・分析的なプロセスを前提としてきたと言える。それに対して誤帰属の過程は、従来の帰属研究で想定されてきた推論過程に比べて、はるかに潜在的で、無意識的なプロセスが関与している。そこで誤帰属の過程を、その構成段階に分解して、それぞれの顕在・潜在性について考察する。

誤帰属の過程は、まず①真の原因が②何らかの内的状態を引き起こすところから始まる。情動の帰属の場合には、①真の原因は、生理的喚起状態を引き起こす物質(例、エピネフリン)や身体的活動が該当し、認知心理学系の誤帰属では、先行刺激(プライム)や単純接触効果における反復呈示刺激などがこれに当たる。

②の内的状態とは、初期の誤帰属研究で扱われてきた情動の帰属の場合には、生理的喚起状態に当たり、近年の誤帰属研究の場合には、既知感、親近感、知覚的流暢性などに該当する。誤帰属とは、そのような内的状態

(②)を真の原因ではない何らかの原因に帰属し、それに基づいた判断や情動を生じる(③)ことを指す。③は初期の研究の場合には、喜びや怒りなどの情動に当たり、後期の

研究では各種の認知的・評価的判断に対応する。

これらの諸段階の顕在-潜在性を考察すると、まず①の真の原因は本人に明瞭に認知されていない。そもそも真の原因が明瞭に認知されているならば、誤帰属は生じないはずである。ただし原因として認知されないまでも、刺激の存在には気づいている場合（閾上呈示）と、存在さえも認識されない場合（閾下呈示）とがあり、①の要素の潜在性の程度は、個々の事例によって異なる。

続いて真の原因に引き起こされた内的・主観的事象②であるが、この要素は、情動帰属の場合には比較的顕在的であり、意識されやすいものであると思われ、認知的判断関連ではそれほど明瞭ではないと思われるが、これは推測であり、現時点では実証的根拠は乏しい。ただし、たとえ明瞭に意識されないまでも、ある程度はこの要素に気づかなければ、それを説明するための推論は行われないうから、誤帰属は生じないことになる。

さらに、①と②の関係、本当の原因である先行要因と内的状態との間の真の因果関係に気づいているか否かという側面も考慮する必要がある。誤帰属が生じる場合には、この関係の気づきは欠如しているのが通例である。プライミング実験では、プライム刺激自体が顕在的であっても、それが概念や感情を活性化し、接近可能性の増大をもたらしていることに実験参加者は気づいておらず、通常無関連な実験とされている後続場面での判断に影響を及ぼしたとは思っていない。もしその関係に気づけば、プライミングの効果は見られないのが一般的である。また単純接触効果でも、反復呈示の効果で処理の流暢性が増していることに気づけば、刺激の好意度は増加しない。

そして誤帰属過程の最終段階である情動の経験や認知的判断（③）は、ほとんどの場合、顕在的かつ意識的であると考えられる。つまり誤帰属過程は、潜在的・無自覚的過程に意識的解釈・説明を与えることであるということができる。ただし、実験において IAT や GNAT などのような潜在指標を用いて反応を測定する場合には、最終的な判断そのものも潜在的であるということになる。先行研究では、潜在指標を用いた場合には、閾下単純接触の効果が検出されやすいが、意識的な評定尺度では有意な結果が出ないことが多い。①の段階の刺激の顕在-潜在性と③の段階の顕在-潜在性には対応関係があるのではないかと推測されるが、これに関してはさらなる検討が必要である。

そして最後に、誤帰属の推論過程そのもの（②→③）は意識されているであろうか？実験参加者に何らかの推論を行ったか否かを直接尋ねても、肯定的な答は得られないであ

ろう。初期の帰属理論では、もっぱら顕在的で意図的・意識的な帰属の推論が検取り上げられてきたが、誤帰属における推論過程は、そのプロセスそのものが意識されにくい暗黙の潜在的プロセスであると考えられる。

## （2）実験的研究

実験的検討にあたっては、プライミングの効果を取り上げ、その手続きを実験参加者が意識できるような刺激を用いて行うか、刺激自体も気づかないような閾下で行うかの点で異なる2種類の実験を行った。

### ① 潜在実験

第1課題ではプライム刺激となる語を閾下呈示するが、刺激のリストを2種類用意した。すなわち特性に関連する語を呈示する特性プライミング条件と、状況関連プライミングに関連する語を呈示する状況プライミング条件の2条件を設け、その効果を比較した。

第1課題では、フィラー2語を含む12語のリストをランダムな順序で10回ずつ、各20ms呈示（その後パターンマスクを20ms呈示）した。リスト中の10語は、特性条件では、「気質」、「能力」など、人間の内的特性に関連する語、状況条件では、「社会」、「制度」など外的状況に関連する語であった。実験参加者は、「光のようなものが出るので、それが注視点の右に出るか左に出るかを判断するように」と教示された。

その後、ディストラクション課題を4分間行わせた後、第2課題の社会的判断に移った。ここでは、比較的曖昧な他者の行動に対して、どのような帰属判断を行うかを検討した。具体的には、図書館のアルバイトをしている学生が、返却の遅れた学生に厳しく対応するという行動に対して、それが本人の性格特性や価値観などによって起こったか、周囲の状況や役割のために起こったかを判断させ、その人物の個人的特性についても推測を求めた。従属変数としては、内的帰属の傾向を示す3尺度、外的帰属の傾向を示す3尺度、および行為者の性格の推測10尺度を用いた。

仮説としては、閾下で特性関連語をプライミングされた特性プライミング条件では、刺激人物の行動を本人の内的原因に帰属し、状況関連語を閾下呈示された状況プライミング条件では、同じ行動を状況要因に外的帰属するであろうと予測した。

参加者は男女大学生19名（男子2名、女子17名、平均年齢20.5歳）、そのうち、刺激が見たと報告した者と教示を誤解した者を1名ずつ除外し、17名分のデータを分析した。実験室内での個別実験として実施した。

結果は、内的帰属関連・外的帰属関連・特性推測のそれぞれについて、条件ごとの平均値を求め、t検定によってその差を分析した。その結果、条件による差が見られた尺度はなく、また平均値の方向も必ずしも仮説方向に

はなっていないという一貫しない傾向を示した。

## ② 顕在実験

顕在実験では、まず第1段階で、潜在実験で使われたのと同じ12語の刺激語のリストを、読みの五十音順に並べ替えるという作業を、実験参加者に行わせた。ここでも潜在実験と同じく、特性関連語を含むリストと状況関連語を含むリストとがあり、それに対応して、特性プライミング条件と状況プライミング条件の2条件が設定された。この作業が終了した後、潜在実験の場合と同じディストラクション課題を4分間行わせ、最終段階の社会的判断課題に進んだ。刺激文および原因帰属・刺激人物の特性推測の質問などは、すべて潜在実験と同一である。

実験は授業終了後、教室で集団的に実施した。配布する用紙に印刷されている刺激語を変えることによって、特性条件と状況条件を設定した。

実験参加者は男女大学生49名(男子14名、女子35名、平均年齢19.2歳)。

結果は、内的帰属関連3尺度、外的帰属関連3尺度、刺激人物の特性推測10尺度について平均値を算出し、t検定によって特性プライミング条件と状況プライミング条件の差を検討した。

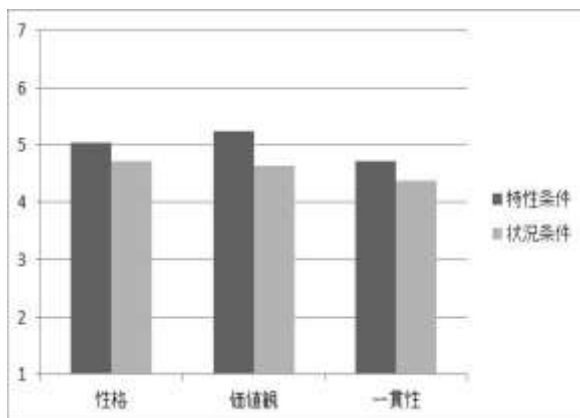
内的帰属関連の3尺度とは、a.刺激人物の性格はどの程度、原因として作用したか、b.刺激人物の価値観やものの考え方はどの程度、原因として作用したかの評定、およびc.刺激人物は同じ場面でいつも厳しい態度をとるか(行動の一貫性)の推定の3尺度である。3尺度の条件別の平均値は図1の通りである。3尺度とも、平均値の差は5%水準で有意ではないが、特性関連語をプライミングした条件の方がいずれも平均値は高くなっており、仮説と一致する方向にある。

図1. 内的帰属関連の評定結果

3尺度の条件別の平均値は図1の通りである。3尺度とも、平均値の差は5%水準で有意ではないが、特性関連語をプライミングした条件の方がいずれも平均値は高くなっており、仮説と一致する方向にある。

外的帰属の3尺度の結果は一貫しておらず、いずれの尺度についても条件間に有意差は見られなかった。

刺激人物の特性推測については、10尺度の



中にフィルター項目も含まれているため、当該

場面での行動と関連の強い4尺度に関する結果のみを図2に示す。全般的に、前課題で特性関連語を並べ替える課題を行った特性プライミング条件の方が、状況関連語を並べ替える課題を行った状況プライミング条件よりも、刺激人物の行動と関連した特性推論を行う傾向が強いことがわかる。このうちで、「気の強い」に関しては、両条件の差が5%水準で有意であった( $t(47)=2.341, p<.025$ )。

このように顕在実験の結果は、必ずしも明確に仮説を支持しているわけではないが、少なくとも内的帰属、特性推測に関しては、結果は仮説方向であり、先行課題でのプライミングの内容によって、後続の判断課題に影響が及ぶことが示唆された。

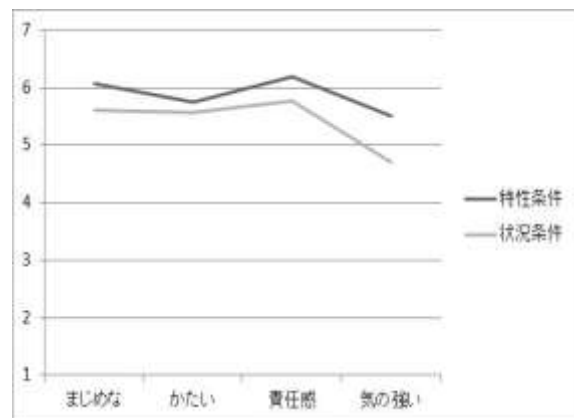
今回の実験において、統計的に有意な結果があまり見られなかった理由としては、プライミングと判断課題の間にディストラクション課題を行わせたことによって、プライミング効果が減衰した可能性が考えられる。また本実験では、内的・個人的原因 vs. 外的・状況的原因という、帰属研究で広く採用されてきた枠組みを用いているが、この枠組みが実験参加者には十分理解されていなかった可能性もありうる。この点を改善するため、手続きや刺激材料を変更した実験を今後も継続する予定である。

## (3) 潜在実験と顕在実験の比較

今回の研究では、実験で利用した帰属の枠組みが実験参加者にとって難解であったためもあり、潜在・顕在両実験とも、結果

図2. 刺激人物の特性推測

は必ずしも明確ではなかった。特に刺激語の閾下呈示を行った潜在実験では、一貫した結果が得られなかった。潜在実験の技術的問題や実験参加者の少なさなどもあり、今回の研究から一般的な結論を導くことは困難であるが、潜在的なプライミングは、刺激が不明瞭で強度が不十分であるため、その効果は限定的であるようにも思える。刺激の顕在・潜在性とその効果については、単純接触効果など、プライミングの以外の現象についても、さまざまな先行研究が行われている。



潜在的な刺激呈示と顕在的な呈示の相対的

な有効性・効果の違いについては、簡単に概括することはできないが、意識的な抑制や抵抗が働く可能性がある場合には、顕在条件で結果が出にくい傾向があるものの、それ以外の場合には、顕在条件の方が効果が大きいと言えるかもしれない。今後、さまざまな種類の認知的・評価的判断を用いて検討していくことが必要である。

#### 5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文] (計 1 件)

外山みどり 誤帰属過程における認知の顕在性 - 潜在性 学習院大学文学部研究年報、第 59 輯, 2012, pp.61-78. 査読なし

[学会発表] (計 2 件)

外山みどり プライミングが帰属判断に及ぼす影響 日本社会心理学会第 53 回大会、2012 年 11 月 18 日、筑波大学

山田歩・外山みどり デフォルトは態度を変えるか 日本社会心理学会第 53 回大会、2012 年 11 月 18 日、筑波大学

#### 6. 研究組織

##### (1) 研究代表者

外山 みどり (TOYAMA MIDORI)

学習院大学・文学部・教授

研究者番号：20132061

##### (2) 研究分担者

太田 信夫 (OHTA NOBUO)

東京福祉大学・心理学部・教授

研究者番号：80032168

山田 歩 (YAMADA AYUMI)

東京大学大学院・情報学環・特任助教

研究者番号：00406878